

＜日本イギリス哲学会 第45回関西西部会例会 報告要旨＞

報告 1 : J. S. ミルの論理学史観

岡本 慎平

本報告では、J.S.ミルが彼以前の論理学と同時代の論理学をどのように評価し、自らを論理学史の上でどのように位置づけていたのかを論じる。父ジェームズによる早期教育の中で、ミルはアリストテレスの論理学諸書（オルガノン）や、スコラ的伝統を引き継いだ17世紀の論理学を学習している。その一方で、ミルが実際にこれらの論理学者をどのように評価しているのかは、これまであまり論じられてこなかった。しかし、例えば『論理学体系』第一巻二章で論じられた名称の分類など、言語の問題についてのミルの論述の多くが、フィリップ・ド・トリュウを始めとする17世紀の論理学者に大きく影響を受けていることは見過ごしてはならない。

ミルはスコラ的論理学の厳密な用語法を高く評価する一方、18世紀以降、リチャード・ウェイトリーの『論理学綱要（1826年）』が出版されるまで論理学の進歩が停滞していたと主張し、また同時代のド・モルガンやウィリアム・ハミルトン、後年にはジェヴォンズらの論理学に対して非常に冷淡だった。ミルの論理学史観を明らかにすることで、なぜミルが彼らに対してこのような態度をとったのかという問題に応えたい。

（広島大学院 文学研究科博士課程後期）

報告 2 : アダム・スミスの同感論と親密性を基礎とした共同体認識

木宮 正裕

アダム・スミスの同感が作用する領域には限定性があるのではないかということが、R.ニエリ、C.L.グリズウォルド、F.フォアマン＝バルジライ、竹本洋などによって指摘されてきた。本報告では、これらの指摘を引き継ぎつつ、同感概念を検討することによって、スミスの共同体認識を再考する。そのために、まず、『道徳感情論』第一部と（第六版）第七部での同感概念の説明の一見した「齟齬」を手がかりに、スミスの同感過程では、物理的境遇と心理的境遇が区別されて論じられていることを確認する。次に、後者の理解のためには、観察者は行為者の属する共同体の慣習の影響を考慮しなければならないが、スミスによれば、この慣習が影響を持ちうる領域は、一国内であることを議論する。しかし、一国内においても、愛着の濃淡があり、それに伴って、同感の成立しやすさも異なると考えられる。こうした議論を踏まえたうえで、スミスにおける「見知らぬ人」の意味や同胞感情の重要性を再考してみたい。

（京都大学大学院 経済学研究科博士後期課程）

（裏面に続く）

報告 3：近世英国共和主義思想における人的ネットワークについて

—王朝交代とハリントン家の関係を中心に—

竹澤 祐丈

近世共和主義思想に関する先行研究において、その人的ネットワークに関する解釈は、その思想の持つエリート主義的な傾向を（経済的な）基底換言論的に言及するものがほとんどであった。たとえば、ジェームス・ハリントンの属するハリントン家に関する記述も、王室との密接な関係を示唆しつつ、そのイデオロギー性を論じられる傾向にあった。

ポーコックの研究以降、こうした解釈の傾向は下火になってきたものの、近世英国の共和主義思想の人的ネットワークが、実際にどのようにその共和主義思想の形成に影響を与えたのかは依然として詳らかにされていない。そこで、本発表では、ハリントンやハリントン家を事例に、この問題を考察したい。議論では、ステュアート朝への王朝交代に深く関わった一門という点が注目し値することを強調することになるであろう。

（京都大学 公共政策連携研究部、経済学研究科併任）